

景况

一 大阪府下政黨ノ景况

七

おれ控聞書一通為由合及少回覽也

明治十五年十一月廿九日 田中丞 結上 任 与



井上内閣書記長殿

自由党本部ニ於テハ該党ノ重立タル輩ト自由新聞記者等カ熟  
談相結約シ三菱會社長岩崎弥太郎カ政府ヨリ實ニ深厚ナル  
不正ノ保護ヲ受ケタル明細書ヲ得ルヲ以テ天下ノ一大雜問トシテ  
言論筆誅以テ政府ト共ニ攻撃セシトス而シテ其明弁書ナル  
ハ自由新聞一週日前ヨリ紙上ニ掲載スル所口ノ岩崎弥太郎之助意見  
書ニ就テ農商務省ノ弁白書之レナリ而シテ該弁白書ハ如何  
ナル手續キニ因テ得ル所ナルカ該書ヲ得ルノ日ハ今日ヨリ數  
週日前ニアリトス然ルニ在昔今日ニ至ルマテ掲載世ニ公ニセサ  
ルハ蓋シ民間ノ一大雜問ニシテ三菱會社ノ為メニ響ヲ受ケ其  
困極ナルヲ後藤象次郎推知シ該事情ヲ岩崎ニ示スニ岩崎ハ  
直ニ貳拾方圓ノ金額ヲ贈リ掲載書棄却セラレシヲ後藤ヲ  
以テ自由新聞社ニ招介ヲ為シタリ然ルニ自由新聞社ニ於テハ議論

ニ派ニ分レ後藤ノ招分容否ノ儀ニ付一時社中紛紜生シタリレモ  
後藤ノ周旋至リタルヲ以テ掲載停止スルノ一決極セシカ金貨  
ノ受取セサルニ先ツ後藤洋行セシヲ以テ其不在ヲ責ヒ今又之  
ヲ記載スルニ至タリタリ之レヲ掲載スル時自由新聞社ヨリ後藤  
ノ招分断然社會ヲ為シ拒絶スル趣キヲ三菱會社ニ申送セリ此  
ニ於テ三菱會社ハ止ムヲ得サルヲ以テ京濱毎日郵便報知時事  
朝野ノ四新聞ニ據リ論旨一致以テ自由新聞ニ抗弁セシメテ致シ  
タリ談新聞四社ニ送ルニ先弁駁ノ費用六万圓ヲ以テス以上列  
叙スル所ハ後藤ノ相談ニ与カリタル自由党本部幹事宮部襄  
ノ親シク相語スル所ナルヲ以テ自由新聞ニ關係ノ事項ハ敢テ  
信スルニ足ル然シテ四新聞ニ送リタル金貨ノ儀ハ未ク確証  
ナレト雖モ蓋シ京濱毎日新聞等ノ事跡ニ於テ其実事ナルヲ  
推想スルニ充分ナル所アリ而シテ前段自由新聞ノ政府ト共ニ

三菱會社ヲ攻撃セシトスルハ農商務省ノ弁駁書ニ就テナリ  
農商務省ハ岩崎弥太郎ハ國家ヲ害スル罪人トヒ云フヘキ弁  
駁ヲ与ヘシカ良シ岩崎カ不正ノ保護ヲ受ケタルモノト言フ  
ト虽モ其有司ノ異ナルノミニシテ同ク明治政府ノ處置ナリト  
ス然ルニ同政府ノ處置ニシテ昔日ノ處置ヲレテ今日ノ政略ニ  
違フ處ロアルヲ以テ今如此岩崎ニ弁駁ニ与フルハ敢テ堂  
々政府ノ為ス可ラナル所ナリトシテ弁駁セシトスルナリ  
右申仕候如ク事状アルヲ以テ改進党ハ總理大隈ニ關係ノ  
ル故ニ延テ全党ニ影御音ノ波及スルヲ恐レ目下專ラ岩崎ニ  
代リ弁駁セシメテ波々トシテ相謀リ主義擴張或ハ党員募  
集等ノ状況更ニ無之儀ト探知仕候

第參指參號  
別紙田邊敬言保局長探聞書供回覽  
候也

明治十五年七月六日

内閣書記官

太政大臣殿

右大臣殿

左大臣殿

山縣參議殿

中郷参議殿

井上参議殿

山田参議殿

松方参議殿

大山参議殿

川村参議殿

福尾参議殿

佐木参議殿

三條大政大臣殿

別紙の如く御事奉り申上り候旨に付、御覽候也。

御事奉り申上り候旨に付、御覽候也。

孫豊隆殿御覧

三條大政大臣殿





別紙探偵書入回覧也

七月廿六日  
寺政大臣

左大臣殿

右大臣殿

山内大臣殿

西郷大臣殿

井上大臣殿

山田大臣殿

山内大臣殿

川村大臣殿

福島大臣殿

伊藤大臣殿



秘考

自由党ノ決議

一 退双カ歸朝スルヤ党員ニ向テ自由党ヲ辭  
クヘキノ議ヲ試ミタリ其主眼ハ左ノ如シ  
一 此迄ノ如キ自由党ノ体裁ニテハ迎テ事ヲ  
天下ニ成シ能ハス断然此時ニ際シ該党ヲ  
解クニ若クハナシ然ラズシテ年月ヲ經過  
セハ自カラ滅亡ヲ招クノ外ナキヲ信スル  
ナリ不去余カ意見ヲ諸君カ採納ニ給ヒテ  
以テ共ニ天下ニ活動セハ甚タ愉快ナルコ  
ナリ其由縁ハ茲ニ四ヶ月若クハ五ヶ月ヲ

自由党ノ決議  
一 退双カ歸朝スルヤ党員ニ向テ自由党ヲ辭  
クヘキノ議ヲ試ミタリ其主眼ハ左ノ如シ  
一 此迄ノ如キ自由党ノ体裁ニテハ迎テ事ヲ  
天下ニ成シ能ハス断然此時ニ際シ該党ヲ  
解クニ若クハナシ然ラズシテ年月ヲ經過  
セハ自カラ滅亡ヲ招クノ外ナキヲ信スル  
ナリ不去余カ意見ヲ諸君カ採納ニ給ヒテ  
以テ共ニ天下ニ活動セハ甚タ愉快ナルコ  
ナリ其由縁ハ茲ニ四ヶ月若クハ五ヶ月ヲ

期シテ金指五万両ノ資本ヲ募集シ以テ壯  
快ニ事ヲ天下ニ成スノ一事是レナリ退介  
ハ必ス以資金ヲ擲テ自在ニ任事ヲ成スノ  
日ハ性命ヲ惜マス此レニ當ルナリト  
右ノ議ノ出ルマ党中議論沸カ如ク或ハ此金  
カ出来ル位ナラハ是迄ニ出来ルヘシ此迄ニ  
出来スレテ今日ニ至リタルハ迎モ出来サル  
徴候ナリト云或ハ各地方部ノ党員ト懇ニ評  
議セハ必ス出来ルベシト云ヒ一時ハ議論紛  
々タリシカ遂ニ出来スルトカ多数説ニテ断

然速ニ游説負ヨ各地ニ派遣セシムルトニ決  
シ高知人二名群馬人二名昨十五日出發セリ

引紙枚密採遺書紙

高麗紙也

十六年七月廿七日

田代書院

寺政大臣殿

月大臣殿

大本寺藏殿

山縣寺藏殿

西郷寺藏殿

井上寺藏殿

山田寺藏殿

山寺藏殿

川村寺藏殿

福寺寺藏殿

高野寛候也

十六年七月廿七日

田代書院

寺政大臣殿

左大臣殿

右大臣殿

山縣左大臣殿

西郷左大臣殿

井上左大臣殿

山田左大臣殿

山崎左大臣殿

川村左大臣殿

福島左大臣殿

方左大臣殿

大正六年七月廿九日  
 三傳方政大臣殿  
 敬啟者  
 貴國政府  
 於大正六年七月廿九日  
 發給之勅令  
 關於  
 貴國政府  
 於大正六年七月廿九日  
 發給之勅令  
 關於  
 貴國政府  
 於大正六年七月廿九日  
 發給之勅令

貴國政府  
 於大正六年七月廿九日  
 發給之勅令  
 關於  
 貴國政府  
 於大正六年七月廿九日  
 發給之勅令  
 關於  
 貴國政府  
 於大正六年七月廿九日  
 發給之勅令

大正六年七月廿九日  
 錦貫發承列誌

三傳方政大臣殿

敬啟者

警視廳



別紙の案を採録す

高野の案也

二十七年七月二十七日

内閣書記官

引致大少殿

月大少殿

大木大少殿

山野大少殿

西郷大少殿

井上大少殿

山田大少殿

村分大少殿

大山大少殿

川村大少殿

福尾大少殿

高麗人等也

十三年七月二十七日

由家書記官

寺政大少殿

月大少殿

大木大少殿

山野大少殿

西郷大少殿

井上大少殿

山田大少殿

村分大少殿

大山大少殿

川村大少殿

福尾大少殿

伊藤大少殿



Handwritten text in cursive style, likely a signature or official seal, located on the right page of the document.

カニ

別紙の如く候々事々此の如く候也  
此の如く候也  
此の如く候也

以治正四年八月廿日

源朝臣

三條大政大臣殿

敬言 親 也

三條大坂大坂

此板垣下中江間

此板垣下中江間

此板垣下中江間

此板垣下中江間三不快ヲ生セリ生登園ハ書テ中江板垣洋行前ヨリ出版會社爲メ辱カシ  
畿内若九外地方ハ出版後社復立チ多ク賛成者存大和ノ土倉三郎公五子園ヲ出ス一ニナリ然  
シテ板垣爲京以米中江一層在右邊ノ慮ハ所ニ在リ勳ヲ答根ノ温泉ニ近隨屬ニ者近日板垣ヲ侮  
國サセ自ラ其風ヲ貴シスルノ意多クシテ此二三日ハ中江大ニ憤怒シテ白ノ意早板垣ノ寓所ニ行カ  
ズ其起ル板垣中江ヲ諷シテ曰ク右出版會社ノ一子土倉力五子園出スト云ク土倉如キ直者生金ヲ  
要ストハ其ノ中江モ在頭着者ナリ其心腹ニ據ス若シ出版會社カ失敗スルキ予ノ名ヲ汚スルニ  
エメテ田中村造ヲモ構置カバ如何カ知ラカ中江ハ如何モ不安心ナリ云ク此言ヲ中江聞返果テ果  
早板垣ト共ニ爲スニ是ナリトシ他ニ交ストマテ怒リ疾道

右板垣下中江間ヨリ中江萬外栗原高一ニ名突然伊查保温泉ニ赴キテ其栗原ノ聖モ地京以米何  
チ板垣下疎情容テナリ或人言フ右兩人ハ板垣ノ慮ヲ見限リ名向人ニ辱カシラモ構マフカ奈途モ  
昨ヨリ板垣ヨリ本郡幹事召集シテ向テ予モ強束ハ八日發テ飛舟ヲ大坂行リ候リトハ既ハ君モ忍耐  
力アリ録自今幸徴負法氏ノ努力ヲ嘉金一ハ君ホ之ヲ援ケ機ヲ失セズ元分ニ斗テリト然レハ返日函  
根ヨリ本部ハ板垣ノ書筒ハ送通高ニ於テ路失テ放テ右書筒中ニ嘉金主筆書入リ花ハ之レカ  
事ナリハ幸徴負法氏カ各地ハ派出嘉金スルニ先例ナリ右書筒中ニ嘉金主筆書ハ入リ花ハ之レカ  
認メサセニト使テ遺リニ栗原ト共ニ伊查保入浴セリト其書筒中ニ嘉金主筆書ハ入リ花ハ之レカ  
ニ淫書ニ憑ル者モ多シハ土倉是再召ト高ニ憑ルハ保レ板垣ハ此ニ嘉金主筆書ハ入リ花ハ之レカ  
其書筒中ニ嘉金主筆書ハ入リ花ハ之レカ  
今三般形板垣ノ録さ各目録ニ号ノ不平ヲ言フテ然谷ヨリ高ノ方ハ漸次進ム御ト云ク勿ク急ニ上  
野ヨリ川内間シ先ニ急ニ号ノ不平ヲ言フテ然谷ヨリ高ノ方ハ漸次進ム御ト云ク勿ク急ニ上  
素上野川内間シ先ニ急ニ号ノ不平ヲ言フテ然谷ヨリ高ノ方ハ漸次進ム御ト云ク勿ク急ニ上

此物多批由古上之皇之在之為海之邊之門下之生自論見之外ハ一ニハ好之漢社也其美  
族ノ馬麻ノ教唆之又工部有之達不下力種業適之由志ノ卑劣多ト一因知流トシテ由  
八月四日

綿貫裕之視副徳望

極密信供

高階是也

下之 内容多望

本村多義成

可將多義成

概名信洪

高階是也

下年 内家

斗本名義後

日精名義後

伊為名義後

西郷名義後

井上名義後

山田名義後

松子名義後

大止名義後

川村名義後

橋本名義後

佐本名義後

族抄

Handwritten text in cursive style, likely a signature or name.

Handwritten text in cursive style.

Handwritten text in cursive style.

Handwritten text in cursive style.

Handwritten text in cursive style.

1 - A. G. L. 11. 18. 18. 2

Handwritten note: トルコと漢社を以て  
因縁とす



自由少黨... 別紙拾頁...  
及田中...  
Handwritten text in cursive style.

明治二十一年八月

日務卿山田顯義



太政大臣三條實美殿

Handwritten text on the left margin.

一自由党常議員ハ昨三十日午後六時ヨリ板垣總理ノ旅  
館川松樓ニ於テ議會ヲ開キ候其要點ハ現今自由党ノ  
有様ハ敢テ衰頹スルト云フニハ非サレモ到底此者ニ  
憑テ目的ヲ達シ得ルキ者ニモ非ス如斯者ナレバ莫大  
ノ金圓ヲ費スモ益ナレ故ニ將來ニ一大運動ヲ為シ得  
ル目的ヲ立ルカ左モナクハ寧ロ散スルカノ議題ニ候  
然ルニ議員ハ二派ニ分レ容易ニ可決セステ明二日  
午後六時ヨリ再會ヲ約セラ散解致レ候

自由新聞社ハ到底維持ノ目的ナク且ツ古沢滋ハ重々  
不正ノ所為アルカ故ニ解雇セントテ本日ハ朝ヨリ自  
由党常議員并新聞社委員ハ噴議會ヲ開キ候又板垣總  
理モ臨會致候 七月一日記

左ノ詩ハ果厚亮一ノ作ニテ先日八百松樓宴會ノ砌リ吟  
セシ者ニテ新聞紙ニ登錄致度モ條例抵觸ノ怖レアル  
ガ故ニ之ヲ記載セズ活版ニ付シ各地ニ送附セシ者ニ  
付上申候

巴黎懷古

塞煙之水巴黎城 地屬坤輿才一名 東洋万里乘槎客  
懷日向誰寄此情 想見路易十四世 苛政威壓猛虜勢  
壯士慷慨志難酬 昂鏹鋸刀前後斃 王家積惡苦蒼生  
堅水不戒履霜際 維時七月肅颯秋 殺氣捲天起城頭  
斬木為兵揭竿旗 一舉義軍誅王侯 殺人如草撥代劍  
屍骸成山血成流 專制君國成我敵 宣戰飛檄震五洲  
千古憂憤民約論 一世功名山嶽党 暴戾驅入亂賊門  
英雄豈徒屈草莽 龍戰虜鬪亂無窮 霸國帝業今終空

自由凱歌  
共和建國貴賤同 儒生知否家國事  
極亂却是致至治 如今泰西文明華 總成澹爪腥兩裏

自由党復ハ板垣退介帰朝后一層急進過激ニ涉リ近頃  
ニテハ自由党ヲ解散シ真正ノ破壊主義ノ者ヲ以テ秋  
盛ノ締合ヲ為サントテ協議致居候

自由党ノ臨時大會ヲ八九月頃迄遷延致セシモ前條解  
散論者ノ多キカ故ナリ且又解散ニ付テハ先ヅ真純タ  
ル破壊主義ノ者ハ相約シテ若レ解散論ノ行ハレサル  
キハ再ヒ自由党ト與ニセサルノ決心ニ有之候趣

群馬縣中學校ハ當時紛議起リ居リシガ右ハ同縣士族  
佐治之等ノ煽動ニヨリテ斯ク生徒中ニ紛議ノ起リシ  
モノナル由又世治之ノ目的ハ中學校ヲ廢シ民権學校

ナル者ヲ設立ノ見込ナル様

○  
一自由党常議員并幹事ハ昨二日午後第六時ヨリ板垣退  
介ノ旅寓ニ會シ容月三十日ニ開キ自由党ヲシテ隆  
盛ナラシムル方途會ノ引続ヲ討議仕候左ニ其景況ヲ  
上申仕候

板垣退介ノ發議ニ吾党今日ノ現状ヲ以テ將來ヲ推  
考スルニ到底小運動ヲモ可為得目的ナレ何トナレハ  
吾党組織已來既ニ數回ノ大會ヲ開キ各地ノ党員ハ輒  
チ之ニ參與シテ數十日ノ日子ヲ費シ漸ク結了スト直  
氏議事ノ要点タル役員ノ改撰ハ維持ノ方途トニ不遇  
ナリ未タ一回トシテ運動ノ方途等ヲ議セシメナレ然  
而巳ナラス僅ニ議決セシ維持ノ方途等ニ至リテハ實

地ニ之ヲ履行セシメナレ故ニ役員其他表立タル党員  
ハ常ニ維持ニ耳及タトシテ大目的タル運動ノ点ニ至  
リテハ之カ方途ヲ議スルニ暇ナレ又各地方ノ党員ハ  
會スル毎ニ維持ノ相談ヲ受ケ不得止之ヲ分擔シテ其  
義務ヲ尽スモ本部ハ之ニ對スルノ義務ナキノミナラ  
ス更ニ味フ可キ相談ナク又事業モナキガ故ニ終ニ倦  
怠心ヲ生シテ本部ニ對スルノ義務モ自カラ怠ルノ場  
合ニ立至レリ之則チ昔党ノ隆盛ナラサル所以ナリ又  
將來ニ小運動ヲモ為レ得ヘカラスト断言セレ所以ナ  
リ以上陳述セシ如ク纒ニ分擔セシ維持金スラ出シ能  
ハスレテ生命ヲ抛タシムルカ如キハ到底望得ヘカラ  
サルナリ又第一ノ生命ト第二ノ財産トニツナガラ全  
フレテ目的ヲ達セントスルモ亦決シテ得ヘキモノニ



非ス如此無望無目的タル者ノ總理ト推舉セラレテ其  
職ニ在ルハ余ノ決レテ欲セサル処ナリ否能ハサルナ  
リ又各地方ノ党員トテモ如此無用物ニ貴重ノ財産幾  
部ヲ投シ永ク保存スルハ決レテ心ヨレトセサル可ナ  
リ故ニ寧ロ解党シテ各地方ノ適宜ニ任サバ或ハ大隊  
運動ハ為シ得ヘカヲサルモ小隊運動ヲ為スニハ反テ  
便利ナラント思考ス然スルモ余モ亦直チニ郷土ニ  
歸リ先ツ四國ノ結合ヲ謀リ九州ヲ與ニレテ聊カ謀ラ  
ント欲スル処アリ然リト雖モ今茲ニ十四五万円ノ金  
額ヲ募集シ將來ニ充分ノ働キヲ為シ得ヘキ目的アレ  
バ決レテ解党ヲ望ムニ非ラサレバ宜ク其方途ヲ議シ  
解党ト決スレバ至急臨時會ヲ開キ度旨陳述セラレタ  
リ因之帶議員并幹事ハ各見込ム処ヲ陳レ一時ハ此レ

十四五万円ノ巨額ヲ募集スルノ目的ナケレバ寧ロ解  
党シテ小運動ヲ試ニトノ發議者多カリシガ又中ニハ  
異論者アリテ若レ吾党ヲ解散スルモハ改進党ノ勢力  
ハ踊々盛ニレテ他日吾党ニ妨害ヲ與フルト必然ナレ  
バ今眼前ニ利益ナキモ之カ命脈ヲ存スル方可然トノ  
論者遂ニ多数ヲ占解党ノ論ハ消滅シ夫ヨリ募金ノ方  
途ノミヲ議セシガ又候衆議區々ニレテ或ハ豪農富商  
ヲ説テ集金セント云フ論者アリ或ハ臨時會ヲ開テ党  
員ヨリ之ヲ募ラントスル者アリ或ハ内藤魯一ノ如キ  
ハ党員ノ財産ヲ不殘打出シ之ヲ以テ公債証券ヲ買入  
党員ハ諛証各ノ利子ヲ以テ糊口ヲ渡クノ方ヲ設ケン  
ト云ヒ一時ハ容易ニ纏ラサリシカ板垣ノ發議ニ全國  
ノ吾党員ハ既ニ五万人ノ余アリ故ニ再ニ出金ヲ促サ

ガルノ約ヲ以テ之ヲ説ク時ハ一人ヨリ捲園ツ、ノ出  
金ヲ為サレムルノハ格別難キトニ非ラス然スルハ  
五万円ノ金額ハ必ス募集レ得ルノ目的アリ又申ニハ  
千円ヲ出ス者アレバ百円ヲ出スモノモアリ且ツ党員  
外ニレテ賛成者モ多クアレバ十万円ハ必ス募集レ得  
ヘクト思考セリ因テ今ヨリ各地ニ手ヲ別チ地方々々  
ニ於テ集金シ之ヲ該地ノ信用アル銀行ニ預ケ置キ日  
ヲ期シテ中央本部ニ集纏メ而公債証各ヲ買入ルナリ  
銀行ニ預クルナリ利子ヲ得ルノ方途ヲ設クルハ其  
利子ニヨリテ充分維持ノ途ヲ設ケ得ヘキナク一人ノ  
頭ヨリ壹円ツ、ヲ出サレムルハ一應難出未事ノ如ク  
ナレモ死生ヲ與ニスル吾党同志ナレバ半ヲ曳テナリ  
トモ出シ能ハザルノ理由ナレ纒カ党内ノ金貸スラ出

シ能ハサル者ナレバ到底死生ヲ與ニシ能ハサル者ナ  
リ若シ幸ニ此議ニ決スレハ余ハ一度郷里ニ歸リ少ク  
モ一万円ノ金額ヲ募集シ來ラント一同此議ヲ賛成シ  
仮令十万円ノ金額ヲ募集シ能ハサルモ必ス募集シ得  
ル迄ハ不止ノ精神ヲ以テ各地ニ手ヲ分ケ尽カセント  
ノ議ニ畧ホ一決仕候之ニ付テハ臨時會ヲ開ト否トハ  
未タ決定セズ又各地ノ負擔方モ追テ定ムルトニ尙  
他ニ良策アラバ再議ヲ開クト約レテ前一時過キニ  
各散解仕候

九州改進黨ト連絡ノトハ豫テ池松豊記等カ周旋致若  
リシガ自由党ニ於テ今少し活潑ナル働ヲ為サハ直ニ  
連絡可致相考申候

自由新聞維持会ハ別ニ良手段モナク新聞ノ体裁ヲ善

クシ読者ヲ増加セシムルヨリ他ニ策ナシ付テハ星亨  
ヲ主任者トシ小室信介ヲ雜報長トシ古沢滋ハ失張如  
旧記者長トシ栗原亮一ヲ論說記者ト定メ植木枝盛土  
井光華等ヲ輔佐トシ又中江為介ヲ容負トシ可成探訪  
ヲ蒙ニレ得意尤ヲ増加シテ之カ維持ヲ為ス一ニ決定  
仕候

一後藤象次即ハ彌就官ノ趣キニ付之ヲ拒ムモ益ナキ  
故洋行前ノ約束モアレバ充分ニ出金ヲ為サシメ而シ  
之ト關係ヲ絶ツトニ決定レ不日幹事ヲ常議ノ中ヨリニ  
三名後藤ノ宅ニ参リ可申由

副仲

本文ニ陳述致候募金意ノ如ク運ハバ先ツ文武館ヲ設  
立シテ壯士ヲ養成スル一ノ第一着手トスハキニ決ス

板垣ノ演說ニモ政府ハ既ニ巡查憲兵等ニ武ヲ熟練セ  
シムレバ人民ニ於テモ亦武ヲ練磨セサル可ラス云々  
ノ趣旨有之候 七月三日記

〇

板垣退介歸朝后如何ナル志趣ヲ有セシカ又如何ナル舉  
動ヲ為サントスルカヲ充分ニ探知セント欲スレハ一朝  
一夕ニシテ容易ニ之ヲ探知シ得ヘキ事ニ非サレバ未タ  
確乎タル処ハ之ヲ探知シ能ハス候得共其大體ニ於テハ  
既ニ及上中候如ク今ヨリ非常ノ尽力ヲ以テ拾四五万ノ  
金門ヲ募集シ將來ノ活動ヲ為サント欲スルノ精神タル  
一ハ退介自カラノ發言ト其發言ニヨリ常議員會ニ於テ  
之ヲ實施着手スル一ニ既ニ決議セシトヲ以テ判然タリ  
然ルニ其活動ニ至リテハ方本種々アリテ專ラ演說誘說

ヲ以テ言論ノ働ヲ為スモ活動ナリ又暴動或ハ要叔ヲ企  
テ干戈ニ訴フルモ亦活動ナリ此二者何レヲ以テ目的ト  
致シ居ル乎ヲ窺フニ未タ猶充クニ探知レ能ハス候得共  
退介ノ最モ厚ク信ヲ置キ且ツ永ク歐洲ニ隨行政シ居リ  
レ栗原亮一ノ詔ル処ヲ兼ルニ或ハ信ナラシ乎ト愚考仕  
候件モ有之候ニ付左ニ上申仕候

抑モ板垣退介洋行以前ノ精神タル充クノ決断ナク其目  
的トスル処ハ輿論ヲ培養シ共勢力ニ換テ以テ言論上企  
望ヲ達シ得ルノ精神ナリレカ洋行后ハ志探一變シ一層  
急激ニ進ミタリ常ニ虎一ニ向ツテ詔ルニ歐洲人士ハ才  
智ニ富ムモ元氣ハ至テ乏シキト想ノ外氣力盛ニレテ中  
モ我國杯ノ比ニアラス實ニ我カ國ノ状態ハ人心日々ニ  
腐敗シ元氣日々衰頹シテ當ニ眼前ノ利己ニ而已汲々ト

レテ國家ノ事ハ恰モ向岸ノ火災ヲ見カ如ク毫モ之ヲ患  
ヒサルハ實ニ慨嘆ノ至リニ耐ヘサルナリ今此有様ヲ以  
テ二三年ヲ經過セシナレハ元氣全ク地ニ落テ如何ナル  
干涉ヲ蒙ムルモ如何ナル折壓ヲ受ケルモ之ニ抗敵スル  
ノ氣力ナクシテ不得止甘受セサル可ラサル場合ニ立チ  
至ルナラン政府ハ疾ク茲ニ目ヲ注キ尠シク文事或ハ才  
智アル者ニハ金カト権カトヲ授ケテ之ヲ政府ノ手ニ附  
ケ又貧窮士族ノ如キニハ授産金杯ヲ與ヘテ之レヲシテ  
背カシメサルノ手段ヲ施シ常ニ當路者ノ目的トスル処  
ハ施政ニ非スレテ人民ノ元氣ヲ減殺シテ政府ノ勢力ヲ  
増加セシムルニアリ或ハ陸軍ヲ擴張シ或ハ無用ノ憲兵  
ヲ置キ或ハ巡査ニ剣ヲ帶バレメ又日夜武ヲ練熟セシム  
ル如キハ皆人民ニ威武ヲ示レテ政府ノ勢力ヲ盛ナラシ

ムルノ手段ニ非サルハナシ又伊藤参議歸朝ノ上ハ世評ノ如ク果レテ政界ハ一變レテ独乙國ノ壓制政界トビスマ一クノ籠絡手段トヲ以テ人民ヲ待遇スル一火然タリ然ルキハ我カ國人民ハ此上如何ナル不幸ニ遭遇スルモ難量又國會ノ如キハ復令廿三年ヲ待トスルモ其期ニ至リ人智微弱ナリ國會開設ハ尚ホ早レ今ヨリ十數年ノ后ヲ期スルト云フカ如キ布告ノ出ヅルモ亦之ナレト保証レカ多シ如此場合ニ至ルモ人心腐敗シ元氣地ニ落チ之カ不正不理ヲ墮スノ實カナケレバ如何セン諾々トシテ之ヲ甘受スルノ他ナシ故ニ昔目的ヲ達スルハ數年ノ后ヲ期ス可ラス又暫クモ猶豫ヲ與フ可ラス速ニ非常ノ果斷以テ匡ク之カ処置ヲ為サ、ル可ラス歸朝ノ上ハ先ツ第一着手ニ解党論ヲ以テ党員ノ氣力ヲ引立第二着手ニ

ハ募金ノ方途ヲ謀リ如意集金ナレバ一大練武館ヲ興シテ壯士ヲ養成シ大ヨリ九州改進党ヲ始メ各地ノ結合ハ連絡ヲ謀リ終ニハ一大私學校ヲ興シテ生徒隊ヲ組織スル迄ニ至ラシメ政府ニ對スルノ實力ヲ充分ニ養成シ正理公道ニ拠テ以テ飽迄モ素志ヲ貫シ止以上陳辯セシ如ク總理退介ハ斷然干戈ニ訴ヘスレテ目的ヲ達シ得ル一ハ到底不能ノ決心ナラン

又解党論ハ精神解党スルノ意ニシテ主張セシニ非ス党員ノ氣力ヲ引立シカ為メノ方略ナラント

以上吳仲仕候亮一ノ語リレ処ト退介歸朝后ノ言語トニ拠テ推測仕候ニ蓋シ如斯志操ナランカト愚考仕候ニ付亮一ノ語リレ依テ御参考上申仕候

一募金ノ為メ各地ニ派出セシ人名地方并ニ派出セント

スル者ハ当令定リレハ左ノ通りニテ今四ノ派出ハ各  
私費ト決定仕候

加藤平四郎新井章吾ハ栃木縣へ出張仕候大井憲太郎

長坂八郎ハ照山俊三山崎重五郎ノ兩人ヲ引連レ群馬

信濃地方へ明日頃派出仕候但大井ハ高等法院ノ此

費用ハ總テ大井憲太郎出金東海道ハ中島又五郎是モ

高等法院處置濟次第出立仕候茨城縣へハ星亨植木枝

盛ノ兩人出張ノ筈但是モ高等法院處置濟次第出立

後地方へハ宮部衞派出是ハ未月初旬頃出立可致候共

他追々ニ各地へ派出可致候又鈴木舎定モ帰縣可致候

○  
一當今岩倉右府ノ大病ニ付自由党員等ハ寄合フ毎ニ同  
右府ノ死ヲ待ツトノ話レヲ為シ居リ申候何トナレバ

同右府ハ薩長ノ間ニ立チニ藩ノ調和主義ヲ採リ居ラ

レシカ為メ未タニ藩ハ分離セサレヒ右府ノ死後ハ二

藩ノ間ニ立ツモノナゲレバ直ニ二藩ハ分離スルト必

然タリ然レキハ長ハ不平ヲ抱テ漸次ニ威ヲ辞シ薩摩

政トナルト亦必然タリ然レキハ人民ノ怨恨モ一層深

クナリ又施政上ノ失策モ極メテ多キニ至シ斯クナル

ハハ之ヲ斃スモ容易ニシテ我目的ヲ達シ得モ從テ近

カラシ故ニ右府ノ大病ハ最モ昔党ノ幸福ニシテ天與

ノ幸ナリ杯ト云ヒアヘル者モ有之候

○  
一自由党總理板垣退介ハ不日此地出立ニテ森脇直樹官

地茂哉等ヲ從ハ募金ノ為メ帰縣ヒラルハ一ニ決定仕

候

一板垣退介ハ近々御地ニ立歸リ候ニ付テハ或ハ暫時仰  
 上ニ滞在セララル、モ難量又募金ノ為メ各地巡回セラ  
 ル、モ難量ニ付中島信行ニ總理ヲ譲リ度趣ヲ常議復  
 ニ向テ請求セラレタレ氏常議復ハ未タ之ヲ諾セス候  
 然レ氏板垣ハ總理ノ任ニ在ルハ飽迫モ欲セサル趣  
 ナレバ早晚總理ノ請求ヲ許可スヘク愚考仕候又板垣  
 ハ責任ヲ免ル、ノ精神ニ非ラスレテ一己人ノ資格ト  
 ナリ一層活動上ニ入スルノ精神ナラント推考仕候

内務卿内申自由

黨ニ係ルニ極意

重供回沙也

内閣書記官

大井泰後氏

山縣有朋氏

重供回遊了也

内閣主計官

大井茶後所

山縣茶後所

河原茶後所

西郷茶後所

井上茶後所

杉本茶後所

大山茶後所

小坂茶後所

福宮茶後所

佐本茶後所



Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), likely a formal letter or document. The text is arranged in vertical columns from right to left.

智時仰  
ハセヲ  
申議  
ス候  
カ  
又板垣  
賞格ト  
仁候

別紙の如く候事... (Text in the right column of the left page, partially obscured by a vertical line)

明正堂より... (Text in the middle column of the left page)

三條右大臣殿 (Address of the recipient)

三編 大政 大政

Handwritten notes in vertical columns, including the name 'R. H. H. H. H.' and other illegible characters.

改進黨久野文雄等カ爾長出身ノ貴顯ヲ離間セシムトシテ左ノ説ヲナス由

又據曰ク進項長物出身ノ参議連ニ民間ノ志士親相謀ニ官民調和ノ説ヲ主唱シテ曰ク此際政府官吏ノ  
改革シ多ク民間ノ志士中人望メシモノヲ採擷シ其欲有所官省ニ任用シ而シテ政府ノ改良ヲ謀興  
論ニ逆ラシムル手段コン得策ナラント主張セシモノモ度里島出身ノ参議之ニ在野ノ人物ト言フ  
概テ自由改進兩黨ノ遠キ人斯ル人物ヲ登用スルハ一忽テ官吏中ニ風波ヲ起シ加害成ニ政府  
ノ組織ノ非難ニ襲更スルノ手段ヲ務ムルニ必然ナラン故ニ其説不可ナラント之ヲ拒由リ即チ兩説  
合セテ又伊藤參議ニ此官民調和ノ説ヲ贊成シテ長官長意見ニ大ニ共ナリ然レ故以テ終ニ  
此等次第自然不和ニ生シテ其ノ一事實ナラント憚ラシモノ也又政府カ此如キ有様トシ我々  
人民カ安寧幸福ヲ現政府ノ言フニ是ラモ東ナレ同ク此快ニ各地者々、起リ其分ニ是モ  
之ヲ喜ビシテ公衆トシテ自由幸福ノ謀ニシテ廢人、為メ努力シテ事ニ達スル計スルニ右  
ニ同ク其意中ノ一松山某物人トシテ、該等側ノ上ニ於テ、事状ノ為下人民ニ告セヨ  
ト云ヒ由

野ニ在者ト官民調和ノ説ニ、福澤諭吉、今程力カシテ之ヲ之ニ矢野文雄ノ説ナリト  
是日田口吉カ社知社方ニ矢野ト談話中矢野云目下政府ノ標榜者カ我改進黨  
續々加入スルト聞ク、實ニ注意ニサレ侍ル又將及下等人民ニ煽動スル手段ニ政府カ  
經濟ノ濫リ、スルトノ一手段ニシテ人民ニシテ政府ノ信ヲ搖カシメサルニ政ヲシテト  
詭ニシト云フ

八月廿六日

第三拾二号

列紙摺物之為地寧靜  
知下海之舟  
各地方自由  
電覽也

明治廿六年十月十日

綿貫終視副總監

三條太政大臣殿

明治廿六年十月十日  
三條太政大臣殿  
列紙摺物之為地寧靜  
知下海之舟  
各地方自由  
電覽也

三條大臣大退陣

三條大臣大退陣

三條大臣大退陣  
 三條大臣大退陣  
 三條大臣大退陣  
 三條大臣大退陣  
 三條大臣大退陣

○久シク諸君ト共ニ其結局如何ト待テ居タル高等法院福島事件ノ公判モ去月十九日ヨリ開廷セリ爾來三週間被告河野氏等六名事實ノ陳述ノミヨシテ(其景況ハ日々各新聞紙上ニテ詳報セルヲ以テ諸君ハ既ニ之ヲ了知セラル、ナラン)未ダ辨論ニ至ラザレバ豫メ其判決如何ヲ知ルニ由ナシト雖モ從來ノ模倣ニ由テ推測スルトキハ強テ同罪セントスルノ傾向ナキヲ保スル能ハザルナリ抑此事件タル僅ケ數名ノ志士ガ精神上ノ契約ニ止リ敢テ内亂ノ惡謀ヲ爲シタルモノニ非ズ其指摘シテ之カ証憑トナス所リノ盟約書ノ如キモ其本書ハ今日ニ至ルモ未ダ發見セズ唯新聞ノ際被告二人命ヲ記認上ノ筆記ヲナサンメタルモノニ過キサレハ固ヨリ犯罪ノ証トスルニ足ラス故ニ輿論ハ其無罪ヲ稱ス然ルニ若シ之ヲ問罪スニ至レハ吾人ハ實ニ畏天ニ號泣シテ上帝ノ裁斷ヲ請ハント欲スルノミ

○総理板垣君一昨十四年郷土ヲ發シテシヨリ以來黨務ノ爲四方ニ奔走シ續テ昨年西遊ノ舉アリテ前後殆ント三年家鄉ノ風月ヲ見ル能ハサレシガ今ヤ黨務ノ寸隙ヲ以テ來十五日頃發京一先歸郷セラル尤歸路本月二十日頃滬華ニ僅ス所ノ關西自由大懇親會ニ在リ數日坂地ニ滞在セラハ、都合ナレハ關西ノ諸君ハ同地ニ趣キ總理ニ面謁セラルレハ好都合ナラン

○曩日ニ改進黨攻撃ノ要旨ヲ報スルノ約ヲナシタリシカ其後種々ノ事情アリテ在黨時日ヲ費シ時機ヲ過ルニ至リタリ而シテ今日ニ至テハ自由新聞及ヒ輸入自由新聞ニ於テ反覆辨論シタル所ヲ以テ諸君ガ財料ニ供スルニ足レリト信ズレバ今又々特ニ之ヲ報ズルノ必要ヲ見ズ故ニ前約ヲ廢ス諸君之ヲ諒セヨ

○各地ノ景況著シキ變動ヲ顯ハサレモ福島新潟ノ如キハ夫ノ事件ヨリ黨員ノ精神益鞏固ニシテ日ヲ逐フテ盛大ニ赴ケリ關東各縣モ曩日ニ東京ニ於テ變權黨ノ攻撃ヲナセシヨリ續々各所ニ僞黨撲滅ノ演說會及ビ勇壯活潑ナル運動會等ヲナシ非常ニ奮起シ其勢恰モ旭日ノ昇ルガ如シ其他各地トモ追々振起ノ姿ニテ會テ黨員ナカリシ地ニモ續々加盟スルモノアルニ至レリ

○今般総理ノ意見モアリ黨ノ爲必要ノ事件アリテ高等法院閉場次第(四五日)中ニハ閉場ノ見込ナリ(常議員星亨吉村明道ノ兩氏ハ東海道大井憲太郎長坂八郎ノ兩氏ハ群馬長野ノ兩縣宮部襄松村文次郎ノ兩氏ハ北陸道中嶋又五郎氏ハ福井岐阜ノ兩縣内藤魯一氏ハ栃木茨城兩縣北田正董森島直樹氏ハ近畿諸縣星亨氏ハ埼玉縣ニ其他常議員幹事ノ中各地ニ分遣ノ都合ニ付其節ハ派遺ノ諸氏ト共ニ充分御盡力相成度尤モ日割等ハ派遺セル當人派出先ヨリ御報知可致答ナレハ隙ニ御合意ニ此段及御報知候

○我黨ノ機關ナル新聞紙ハ只自由新聞アルノミナレバ充分其盛大ヲ希望スル所ナレハ創業以來日猶淺ク社員其事務ニ習熟セサル點モアルヘキナレハ兎角黨員ノ之ヲ視ルノ情亦薄キ所ナキヨシモ非ルカ如シ故ニ我主義ヲ擴張スルノ新聞トシテ視ルルハ發賣ノ紙數少ク社運亦隨テ隆盛ナラサルノ虞ナキヨアラズ實ニ以テ我黨ノ儲ミトスル所ナリ願クハ地

方ノ諸君一層ノ愛情ヲ加ヘ爲メニ周旋盡力ヲシヨ

○臨時會ハ常議員等各地ノ巡回ヲ終ヘテ歸京ノ上更ニ確定スヘキ見込ナレド多分十月初旬頃ニナルベシト豫想ス

○前右府岩倉氏先月二十日死去セラレタルコトハ新聞紙上ニテ諸君ノ知ラル、所ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力アリ大政上大ニ關係ナリ有シタル趣ナレハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトナラン又昨年來擅制ヲ以テ有名ナル獨逸國ノ憲法取調トカニテ派遣シ居タル伊藤參議モ彌々去ル四日歸朝セリ同參議カ歸朝ニ付テハ或ハ内閣ニ憲法取調局ヲ設ルトカ或ハ非常ノ改革アルトカ種々ノ浮評ヲレモ未タ確平タル説ヲ聞クニ由ナレ然レモ此ニ事ハ多少官海ニ風波ヲ起スノ原因ナラント信ス猶其詳細ノ事ハ他日報道スル所アルベシ

○前幹事林包明氏カ葬日ニ不應ノ難ニ遭過シ冤罪ヲ蒙リタルコトハ諸君ノ已ニ知ラル、所ナリ而シテ氏カ東京輕罪裁判所ノ判決ヲ不服トシ上告シタルハ實ニ本年一月六日ナリシ上告中保釋ヲ許スコトハ一般ノ慣例ニテ殆ント通則ノ如キモノナルコトモ拘ラズ氏ハ獨リ其保釋ノ典ニ遭フコト能ハスシテ殆ント二百日ノ間空ク獄窓ノ辛酸ヲ嘗メタルコト又且去月二十日上告ノ趣意貫徹セズ原裁判ノ通(重禁錮ニケ年罰金十五圓)ト大審院ニテ判決セリ而シテ氏カ此刑ニ觸レタル原因ナリ同ハ酒席ニ亂入シタル巡査ヲ詰問セシコト過キス目ノ見ル所十指ノ指ス所口以テ罪ナシト然レモ此重刑ニ處セラレタルハ最モ怪シムヘキコトナレバ仔細ニ其事由ヲ探索セタルコト何ソ圖ラン

○○卿ヨリ司法卿ニ向テ林包明ノ事ヲ知キハ將來警察ノ權力ニ關スル義ニ付預メ該裁判所ニ御内閣相成候補職度云々ト照會アリ司法卿ヨリモ其意ヲ以テ夫々訓示セラレ終ニ此ニ至リタルモノナリト豈驚愕ノ至リナラスヤ此ニ至テ林包明氏ノ不幸亦極レリト云フベシ

○本年一月死去セラレタル元ノ自由新聞ノ記者櫻田百衛氏(百華園ト号シ西洋血潮ノ小暴風ヲ編輯セシ人トシ)ノ爲メニ其石碑ヲ立ルコト及ヒ前條ノ河野廣中林包明氏等ノ家族ヲ扶助スルコト有二件ハ小事ノ如クナレモ我々志士ニ於テハ又當キニ尽スヘキノ義務ナレハ在京ノ有志相謀テ其贖金ニ尽力中ナリ地方ノ諸君金ノ多少ニ拘ラス陸續募投シテ此事ヲ贊助アレ

○分擔金ノ事ニ付テハ屢本館ノ内情モ御通知ニ及ビタル如ク昨年度ニ於テモ出入相適ヒズ其負債ニ屬スルモノ多分有之且ツ本年度モ春來平年ニ比スレバ事多クシテ費途多端ナリ而シテ本年度ノ分擔金ハ昨年ノ三分一ニモ充ザル程ノ少額ナレバ各地完納スルモ猶不足ヲ來ス程ナリ然ルニ昨年度分擔金ノ不足ハ勿論本年度ノ分擔金モ僅カニ其收入シタルモノ三百圓ニ充ザル程ノ有様ニテ幹事等四方ニ奔走シ自ラ負債ノ黨務ヲ辨ズルモ猶屬通信費ニダモ差間ヲ生ズル程ノ始末ナリ故ニ地方諸君ノ其負債金ヲ送付セラレザルコト於テハ到底事務ヲ運ヒ黨勢ヲ張ル能ハザルモノナラズ之ヲ永遠ニ維持スルコト覺東ナレ故ニ我々ハ自己一身ノ爲メニ愛人ニ乞フカ如ク平身低頭シテ諸君ニ送金ヲ哀嘆スル能ハザレバ唯諸君カ此黨ニ對シ義務ヲ尽シ得ルヤ否ヲ問フ諸君其義務ヲ尽ス能ハズトナレバ我々ハ諸君ニ代テ此等ヲ採ル能ハザル而シテ幸ニ速ニ確答アレ

伊藤野矢

別紙を各侯々奉じ此の旨を代電覽せ

伊藤野矢

伊藤野矢

三條大政大臣殿

方ノ謝罪一層ノ整備ナ加ヘ爲メニ恩賜勲章ヲ授ケル

○臨時會ハ常設會等各地ノ巡回ヲ終ルニ至リテ東京ノ上野ニ臨定スヘキ見込ナレド多分十月初旬頃ニ於テハハシト豫想ス

○前右府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

局ヲ設クシテ或ハ非常ノ改革アルニカ種々ノ浮評ノ有リ未ダ確平ナル説ヲ聞クニ由リ然レド此二事ハ多少官海ニ感

動ヲ起スル原因ナラシムルニシテ其ノ結果ニシテ他日何道ノ事ヲ成ルニシテハ

○前府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

局ヲ設クシテ或ハ非常ノ改革アルニカ種々ノ浮評ノ有リ未ダ確平ナル説ヲ聞クニ由リ然レド此二事ハ多少官海ニ感

動ヲ起スル原因ナラシムルニシテ其ノ結果ニシテ他日何道ノ事ヲ成ルニシテハ

○前府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

局ヲ設クシテ或ハ非常ノ改革アルニカ種々ノ浮評ノ有リ未ダ確平ナル説ヲ聞クニ由リ然レド此二事ハ多少官海ニ感

動ヲ起スル原因ナラシムルニシテ其ノ結果ニシテ他日何道ノ事ヲ成ルニシテハ

○前府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

局ヲ設クシテ或ハ非常ノ改革アルニカ種々ノ浮評ノ有リ未ダ確平ナル説ヲ聞クニ由リ然レド此二事ハ多少官海ニ感

動ヲ起スル原因ナラシムルニシテ其ノ結果ニシテ他日何道ノ事ヲ成ルニシテハ

○前府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

局ヲ設クシテ或ハ非常ノ改革アルニカ種々ノ浮評ノ有リ未ダ確平ナル説ヲ聞クニ由リ然レド此二事ハ多少官海ニ感

動ヲ起スル原因ナラシムルニシテ其ノ結果ニシテ他日何道ノ事ヲ成ルニシテハ

○前府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

局ヲ設クシテ或ハ非常ノ改革アルニカ種々ノ浮評ノ有リ未ダ確平ナル説ヲ聞クニ由リ然レド此二事ハ多少官海ニ感

動ヲ起スル原因ナラシムルニシテ其ノ結果ニシテ他日何道ノ事ヲ成ルニシテハ

○前府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

局ヲ設クシテ或ハ非常ノ改革アルニカ種々ノ浮評ノ有リ未ダ確平ナル説ヲ聞クニ由リ然レド此二事ハ多少官海ニ感

動ヲ起スル原因ナラシムルニシテ其ノ結果ニシテ他日何道ノ事ヲ成ルニシテハ

○前府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

局ヲ設クシテ或ハ非常ノ改革アルニカ種々ノ浮評ノ有リ未ダ確平ナル説ヲ聞クニ由リ然レド此二事ハ多少官海ニ感

動ヲ起スル原因ナラシムルニシテ其ノ結果ニシテ他日何道ノ事ヲ成ルニシテハ

○前府岩倉氏死後二十日死去セルレドハ新報紙上ニテ諸君ノ知ラレ、斯ナリ而シテ氏ハ廟堂ニ在テ最モ勢力ヲ

大政上大ニ關係シ有シタルニ因テハ氏ノ死亡ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

國體論ノ憲法學識ヲ以テ有シタルニ因テハ氏ノ死ハ政治社會ニ多少ノ影響ヲ及スコトヲ又昨年來權制ヲ以テ有名ナル

水又此歩人等推当地方休道日寧舒彼會由者其部言り各地書夫の記布に内記書美濃金伴  
 中記載之原因未詳各付済済之区且全圖より概状之悉先之より故今般即多言  
 法源方確実其之より下云

板垣為孝道、快程之依り、治の十日、後、他、海、津、浦、船、行、スル、途、次、物、大、坂、下、三、内、央、之、由、本、人  
 言、之、所、之、八、多、分、年、前、上、海、津、之、船、次、之、下、又、隨、行、之、所、當、地、有、其、小、谷、雁、留、治  
 卜、云、り、但、時、機、之、依、り、表、陽、山、村、外、一、名、日、隱、り、ス、ル、モ、知、レ、ス、也、之、ハ、未、ク、確、定、セ、テ、由

十三年八月十日

子儀叔字孫節

田實是也

月廿四

白濁書

劫政大

月大

牛本

山好

河友

西郷

井上

山田

了乃

太山

日村

祝名



吉政大少殿  
左大少殿  
牛本系議殿  
山縣系議殿  
河友系議殿  
西郷系議殿  
井上系議殿  
山田系議殿  
杉方系議殿  
古山系議殿  
日村系議殿  
神尾系議殿  
川本系議殿

雁

Handwritten cursive text, likely a letter or official document, written in vertical columns from right to left.

取  
昌  
吉  
二

共  
少  
各  
所  
申  
由

荷  
取  
申  
之  
何  
所  
由

之  
由  
申  
由  
申  
由

カ  
ワ  
ル  
事  
也  
別  
紙  
に  
取  
付  
し  
意  
見  
を  
有  
由  
書  
き  
奉  
上  
方  
況  
所  
用  
供  
之  
為  
之  
為  
由  
申  
由  
申  
由  
供  
電  
覽  
也

可  
取  
付  
之  
由  
申  
由

綿  
賣  
警  
視  
副  
總  
監

三  
條  
大  
政  
大  
臣  
殿

警  
視

方ノ際第一層ノ愛憎ヲ知ルニ因テ其力ヲ示ス

頃日我自由黨總理板垣退助君吾儕ヲ會シテ謂テ曰ク予ハ自由黨既  
往ノ迹ニ就テ之ヲ考フルニ竊ニ胸中ニ惓然クル無キヲ能ハズ請フ  
諸君ノ爲メニ一クビ之ヲ言ハジ抑々我自由黨ハ有志ノ士ノ相共ニ  
集合セテ天下ノ大事ヲ以テ自ラ任ズル者ニ非ズ乎果シテ然ラバ其  
行爲ノ際自ラ其目的ヲ達スルコトヲ求ムルノ實無カル可ラズ而シテ  
予ハ未ダ我黨員諸子ノ所謂目的ヲ達スルヲ求ムルノ實有ルヲ見ズ  
今其一ニテ衆ケテ之ヲ例セシ初メ諸子ノ自由新聞ヲ創ムルヤ以爲  
ラク既ニ一政黨ヲ擁立スルハ亦必ズ一新聞ヲ置キ之レガ喉舌ヲ  
備ヘザル可ラズト既ニシテ事緒ニ就クニ及ビテハ其心ヲ用ユルコ  
ト復々初時ノ如クナラズ甚シキハ或ハ既ニ約シタル株金ヲ出カバ  
者有ルニ至リ遂ニ新聞ヲシテ其事業ヲ張大コスルコトヲ得サラン  
タリ又彼ノ軍部諸子見ズ乎其黨員ノ巡回及ヒ諸務ノ經費ニ充ルガ  
爲メニ約ヲ定ムル大率歳ニ僅ニ數百千金ニ過ギズコト猶且其半ヲ  
收ムルコト能ハズ遂ニ當局者ヲシテ掣肘ノ患ヲ免ルハコト能ハザラ  
メタリ語ニ曰ク百里ヲ行ク者ハ九十里ニ半スト今ヤ我黨ノ事業

ル纒ニ創始ニ屬シテ而シテ黨員諸子ノ懈怠シテ事ニ勤メザルコト既  
已ニ斯ノ如シ往ヲ推テ來ヲ料ルニ余ハ我黨ノ果シテ其目的ヲ達ス  
ルヲ得ルハ幾十年ノ後ニ在ルヲ知ラザル也余豈胸裡ニ慷慨ヲ  
無キヲ得シ乎夫レ既ニ黨ヲ立テ形ヲ存スルハ亦其目的ヲ達スル  
ノ方法無カル可ラズ苟モ其目的ヲ達スルノ方法無キハ黨ヲ  
解キ形ヲ散シ人々自ラ肆ニスルニ愈レリト爲スニ如カザル也且ツ  
余汎ク天下ノ勢ヲ察スルニ世ノ活潑奇偉ノ士天下ノ大事ニ任ズル  
ニ足ル者或ハ我自由黨ノ在ル有ルガ爲メ故キラニ傍觀者ノ地ニ  
立テテ肯ヘテ自ラ進マザル有ルモ未ダ知ル可ラズ諸君余ノ此言ヲ  
聞クヤ或ハ予ヲ以テ事ニ倦ミテ自ラ逸スルコトヲ求ムルト爲サン乎  
余不肖ト雖也國事ニ盡瘁シテ身ヲ顧ミザルコト幾年ヲ蓋シ亦諸  
君ノ明知スル所也諸君若シ必ズ我自由黨ヲシテ舊ニ依リ形ヲ存セ  
シメント欲スルハ其目的ヲ達スルノ方法ヲ求メザル可ラズ願フ  
ニ此方法タル頗ル浩繁ナリト雖也其最モ急要ナル者ヲ舉ルハ曰  
ク講習所ヲ置クナリ曰ク黨員ノ巡回ヲ盛ニスルナリ曰ク新聞ノ業

ヲ昌ニスルナリ曰ク出版ノ業ヲ起スナリ曰ク練武場ヲ設クルナリ  
曰ク外國ノ人ト交通スルナリ曰ク集會場ヲ開クナリ  
夫レ新聞ノ業ヲ昌コシ黨員ノ巡回ヲ盛ニスルコトノ急務タルコトハ既  
ニ諸君ノ明知スル所ナルヲ以テ再ヒ茲ニ喋々スルヲ須イズ  
講習所ヲ置ク所以ノモノハ他無キ我黨既ニ天下ノ大事ヲ以テ自ラ  
任ズルハ當サニ務メテ書ヲ讀ミ道ヲ講シ以テ之ニ膺フルニ堪ユ  
ルコトヲ求メザル可ラズ  
出版ノ業ハ世上既ニ其設ケ有ル者一ニシテ是ラズ且ツ必ズシモ直  
ニ我黨事ニ交渉有ルニ非ズ故ニ若シ世上既設ノ者ノ中果シテ我黨  
ノ旨趣トナル所ニ適合スル者有ルハ我黨爲メニ贊助ノ功ヲ加ヘ  
テ可ナリ必ズシモ別ニ之ヲ置クコトヲ須イザル也  
練武場ヲ設クル所以ノ者ハ亦故アリ蓋シ中興以來士ノ常職ヲ解キ  
歩武止齋結伍儀隊ノ事ハ獨リ軍人ノ任ズル所ニシテ昔日ノ所謂士  
人ハ復タ與ルコトヲ得ズ且ツ文藝ノ道日々ニ間ク少壯ノ徒唯ダ書帙  
是レ事トシ終日兀兀トシテ絶ヘテ筋ヲ練リ力ヲ養フコト

明治十六年八月

新島十吉

無シ夫レ身體脆弱ナルハ志氣モ亦隨ッテ振ハザルハ自然ノ理ナリ故ニ今ニ於テ練武場ヲ置キ少壯ノ輩ヲシテ擊刺ノ術ニ習ハシムルハ其身體ヲ健ニシ其志氣ヲ養フニ於テ其益益シ鮮少ナラザル也

凡ソ人一邦一州ニ局シテ其外ヲ見ザルハ智見隨ッテ偏狹ニ陷イルハ是レ免レザルノ數ナリ我黨既ニ經國ノ大志ヲ抱持スルハ宜ク廣ク歐洲諸國ノ人ト交際シ奇傑ノ士ヲ尋テ通問ノ僑ヲ訪ヒ相共ニ論議シテ以テ益々識見ヲ廣メ増々黨議ヲ張り延テ亞細亞諸邦ニ及ヒ漢土地方ノ人民ニシテ其昏惰ノ氣ヲ振ハシムルハ蓋シ欠ク可ラザル所ナリ外邦人ト交通スルニ豈甚重要ナラズ乎

我黨夙ニ經國ノ志ヲ持シ自由ノ清議ヲ期リ之ヲ遠近ニ播揚スルノ道理上ノ一大黨會ト云ハシガ如キ者ヲ結成シテ以テ今代ノ輿論ヲ培養ス可シ此レ豈我黨ノ素志ニ非ズ乎然レハ則チ集會所ヲ開キ相共ニ討論シ演說シ以テ我黨ノ旨趣トスル所ナリ明ニスルノ必要ナル

ハ言チ快クズシテ明ナリ

以上數者ハ皆當今ノ要務ニシテ必ズ之ヲ舉ケント欲スルハ十餘万ノ財ヲ募集スルニ非ザレバ不可ナリ諸君果シテ予ト俱ニ我自由黨ノ爲メニ盡力セント欲スルハ何ゾ速カニ此方法ヲ成スヲ求メザルヤ諸君其レ之ヲ助メヨ

我總理ノ言蓋シ此ノ如シ吾儕之ヲ考フルニ復タ一辭ノ措ク可キ無ク乃チ相議シテ之ニ從フニ決シタリ未ダ知ラズ我黨員諸君ノ所見果シテ何如ゾヤ我黨員諸君苟モ其當初板垣君ヲ選テ總理ト爲ヒシ所以ノ意ヲ回顧スルハ必ズ其偶然ニ非ザルヲ知ラン試ニ此ノ如クナルトキハ今日ニ於テ丞ニ總理ノ言ヲ納レテ之ヲ實行スルニ真ニ千歳ノ一時ナリ我黨員諸君願クハ意ヲ留メヨ

明治十六年八月

別紙自由堂書券金方説示

一又ハ此ノ書券ハ紙

一四圓算ノ事也

明治二十一年

由良書院

天政大正版

月大正版

大木大正版

山縣大正版

伊藤大正版

市野大正版

井上大正版

山田大正版

杉方大正版

大山大正版

五月二十四日

内閣書記官

天政大臣殿

月左大臣殿

大木大臣殿

山縣大臣殿

伊藤大臣殿

中野大臣殿

井上大臣殿

山田大臣殿

杉方大臣殿

大山大臣殿

川村大臣殿

神尾大臣殿

伊藤大臣殿

式六

式七

式八

式九

式十

式十一

自由黨本部員下臨時會案概  
況別紙抄知儘申任也

明治五年三月三日 内務卿 山田顯義

太政大臣 三條實美殿



今般開設農自田黨會議、本月二十日、

會合討議スルニ、人々會議セルモノを中カシ

各地より信付る、乃て以東京セルノ凡て名、今田世ありしが、其他多し初案あり

近前在在、進進而シテ新ニ出京セル者ハ常々、

為る也、縣者多ク、之ハ信、要縣と進キ、思進、討議

セシ、件ハ該黨員、信付ル、乃て新ヤ、出京セルノ

ハ、シテ、島、集、スル、名、ニ、多、シ、シ、テ、神、多、川、縣、ノ、如、キ、ハ、島、

ノ、シ、テ、島、集、スル、名、ニ、多、シ、シ、テ、神、多、川、縣、ノ、如、キ、ハ、島、

ノ、シ、テ、島、集、スル、名、ニ、多、シ、シ、テ、神、多、川、縣、ノ、如、キ、ハ、島、

ノ、シ、テ、島、集、スル、名、ニ、多、シ、シ、テ、神、多、川、縣、ノ、如、キ、ハ、島、

ノ、シ、テ、島、集、スル、名、ニ、多、シ、シ、テ、神、多、川、縣、ノ、如、キ、ハ、島、

ノ、シ、テ、島、集、スル、名、ニ、多、シ、シ、テ、神、多、川、縣、ノ、如、キ、ハ、島、

既ニ、島、集、スル、名、ニ、多、シ、シ、テ、神、多、川、縣、ノ、如、キ、ハ、島、



公事先熱  
該日ハ片岡此ノリ

全七首

維持相波タルヲハ  
夏冬ノ事

相波ニタル  
夏冬ノ事

向モリ  
而後何出全スル  
夏冬ノ事

赴キ  
維持ノ議  
夏冬ノ事

附該日ハ片岡  
該日ハ片岡此ノリ

板垣  
未上  
夏冬ノ事

トテ  
又板垣  
夏冬ノ事

以上  
大勢ヲ要約  
夏冬ノ事

居ル  
聲ハ口  
夏冬ノ事

カ如ク  
ミシテ  
夏冬ノ事

維持ノ物  
心ナル  
夏冬ノ事

東ノ  
事ノ頃  
夏冬ノ事

早北田  
乃上  
夏冬ノ事

ルヲ  
謝  
夏冬ノ事

ノ  
歴  
夏冬ノ事

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

第百四十卷

別段 乃見 奉 千 之 九 為 共 子 已 入 國 也

天保六年 正月 榊山 敬文 總裁

三條 為 政 大臣 殿

警 視 廳





格 奏

内務卿 奏之 視總監  
より 由申自由黨  
近之 及二 徴供  
高 隆之 也

明治十二年十一月廿一日 内閣書記官

太政大臣 三條實美 殿

左大臣 熾仁親王 殿

参議 大木喬任 殿

参議 山縣有朋 殿

参議 伊藤博文 殿

参議 西郷從道 殿

参議 井上馨 殿

参議 山田顯義 殿

参議 松方正義 殿

参議 大木喬任 殿

近江二御供  
高僧也

明治十二年十一月廿五日 内閣書記官

太政大臣三條實美殿

左大臣熾仁親王殿

参議大木喬任殿

参議山縣有朋殿

参議伊藤博文殿

参議西郷従道殿

参議井上馨殿

参議山田顯義殿

参議松方正義殿

参議大山巖殿

参議川村純義殿

参議福岡孝弟殿

参議佐木高行殿



三條大政大臣殿

御書

御書

御書

御書

御書

別紙今般自申書臨の書議案已新少申也  
揚載者之様之承知は少申申今迄代電候也

の法子子有十留 樺山越之記後監

三條大政大臣殿

十六年十月臨時會議案

第一 盟約書第十四條及第十五條之廢止金拾万圓以上嘉果之遠永維持法云々之旨

第二 従来寄附金規則之廢止脱收分金面嘉果金内之組込

第三 本年十二月限各地出金者之姓名及金額之取調(各出金者捺印シタル帳簿表之之寧靜館へ送達スル)

第四 前條金額左二期寧靜館へ押込スル  
十六年十月限出金五十分一  
十七年四月限出金五十分一

第五 各地嘉果金委員會下嘉果金團一切事務ヲ委任トシ委員之徳ニ此事トシカスル  
但各縣下嘉果金委員會出金會及於之取極

第六 十七年二月更ニ此旨ノ旨ヲ嘉果金ノ委員會議ス  
但此旨重期日及多少ノ仲臨ニ事議ス

第七 徴收シタル金確實ナル銀行ホ預メ置ケル  
第八 徴收シタル金在京常議及之管理スル

Table with multiple vertical columns, likely for recording financial data or meeting minutes. The table is mostly empty.

十六年十月臨時會議按

第一 盟約書第十四條及第十五條之廢止金拾万圓並嘉果と遠泳維持法方々云々

第二 従来寄附金規則之廢止脱收分金由嘉果金由組云々

第三 本年十月限各地出金者姓名及金額取調(各出金者捺印之レ帳簿表之之寧靜館返達云々)

第四 前條金額左二期寧靜館(押込云々)  
十六年十月限出金五十分一  
十七年四月限出金五十分一

第五 各地嘉果金委員首下嘉果金圖一切事務委任下委員受任之此事是力スレ  
但各縣下委員委員出金會受任之取極云々

第六 十七年二月更此何會之関し嘉果金之表分議云々  
但且其會期日多或少ノ仲端事派受任云々

第七 徴收シテ金確實ト銀行ホ預メ置ク  
第八 徴收シテ金在京市派受任管理云々

臨時會議案高次、借  
臨時會議案高次、借

明治十六年十一月十九日 内閣書記官

大政大臣三條實美殿

左大臣熾仁親王殿

右大臣大木喬任殿

參議山縣有朋殿

參議伊藤博文殿

參議西郷從道殿

參議井上馨殿

參議山田顯義殿

參議松方正義殿

參議大山巖殿

參議川村純義殿

參議福岡孝弟殿

參議佐木高行殿

奉 命 大 臣 行 殿

大 臣 行 殿

大 臣 行 殿

大 臣 行 殿

大 臣 行 殿

松

山

松

松

奉 命 大 臣 行 殿

別 領 守 山 一 段 日 本 寺 方 近 供 奉 決 乃 也

明 治 三 年 十 月 廿 七 日

樺 山 發 行 總 監

三 條 友 政 方 長 殿

三

警 視 廳

七

# 川縣北國北歌歌

公府崇厚州臣加 藩司崇厚州臣加

此後此日一版五版此日一版五版

書

校回之念... 世九日... 諸君... 甲... 乙... 丙... 丁... 戊... 己... 庚... 辛... 壬... 癸... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百...

諸君... 甲... 乙... 丙... 丁... 戊... 己... 庚... 辛... 壬... 癸... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 一百...

このコマには文字の不  
鮮明な部分がありますか  
ら下記の原本をみて下さい

請求番号

2A 1 別 9





このコマには文字の不  
鮮明な部分がありますか  
ら下記の原本をみて下さい

請求番号

2A 1 別 9



このコマには文字の不  
鮮明な部分がありますか  
ら下記の原本をみて下さい

請求番号 2A 1 別 9



十六年十月臨時會議決

第一

第二

第三

第四

第五

第六

第七

盟約書第十條及第十一條之金拾萬圓以上之募集は速に維持法方之要あり  
本年十月限、各地出金者姓名及金額、取調若出金者、捺印して帳簿之製し之、寧  
靜館に送達す。

前條金額、左前、寧靜館に納す。  
十六年十月限、出金萬五千元、十七年四月限、出金萬五千元、  
但後期分、一月以後、納す、勿論、在り、妨げず、又、押込手順、募金委員、手經、出  
金者、自ら送達、各、其、便利、す。

各地、募金委員、置、其、全、同、一切、事務、委任、す、其、堂、負、任、此、事、盡、力、す、  
但、右、縣、下、募金委員、出、京、當、欠、於、取、扱、す、一、募金委員、姓名、後、見、す。

十七年四月限、向、了、募金、數、及、若、院、將來、方、向、之、議、  
也、其、間、金、期、日、及、多少、仲、縮、事、議、す、也。

徵、取、之、金、確、實、に、銀行、等、に、預、け、す、也。  
徵、取、之、金、在、京、市、議、會、に、送、付、す、也。

奉、  
別、  
別、  
別、

別、  
別、  
別、  
別、

西、  
西、  
西、  
西、

三、  
三、  
三、  
三、

三、  
三、  
三、  
三、











酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

酒類稅 七百五十元  
船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

船稅 七百五十元  
合計 七百五十元

北海通商  
船稅 出税七万三千五百拾五圓  
倉庫稅 拾七万。出税拾五圓

第九年度 (決算表、概一)  
合計三百拾七万八千八百拾五圓 (右出税万七千八百拾五圓) 出税八千八百拾五圓

酒類稅 出税拾万七千五百拾五圓  
北海通商 三拾万五千八百拾五圓

車稅 出税五万五千五百拾五圓  
改量納稅 出税七千七百拾五圓

第十年度 (決算表、概一)  
合計 出税拾七万七千八百拾五圓 (右出税万七千八百拾五圓) 出税八千八百拾五圓

酒類稅 三万五千五百拾五圓  
北海通商 三拾万五千八百拾五圓

車稅 出税五万五千五百拾五圓  
改量納稅 出税七千七百拾五圓

煙州稅 出税五万七千七百拾五圓  
船稅 拾五万五千五百拾五圓  
改量納稅 出税七千七百拾五圓

煙州稅 出税五万七千七百拾五圓  
船稅 拾五万五千五百拾五圓

倉庫稅 出税五万七千七百拾五圓  
倉庫稅 出税五万七千七百拾五圓

煙州稅 出税五万七千七百拾五圓  
船稅 拾五万五千五百拾五圓

倉庫稅 出税五万七千七百拾五圓  
倉庫稅 出税五万七千七百拾五圓

第十一年度 (決算表、概一)  
合計 出税拾七万七千八百拾五圓 (右出税万七千八百拾五圓) 出税八千八百拾五圓

酒類稅 出税拾万七千五百拾五圓  
北海通商 三拾万五千八百拾五圓

車稅 出税五万五千五百拾五圓  
改量納稅 出税七千七百拾五圓

第十二年度 (現計、概一)  
合計 出税拾七万七千八百拾五圓 (右出税万七千八百拾五圓) 出税八千八百拾五圓

酒類稅 出税拾万七千五百拾五圓  
北海通商 三拾万五千八百拾五圓

車稅 出税五万五千五百拾五圓  
改量納稅 出税七千七百拾五圓

第十三年度 (現計、概一)  
合計 出税拾七万七千八百拾五圓 (右出税万七千八百拾五圓) 出税八千八百拾五圓

酒類稅 出税拾万七千五百拾五圓  
北海通商 三拾万五千八百拾五圓

車稅 出税五万五千五百拾五圓  
改量納稅 出税七千七百拾五圓

第十四年度 (現計、概一)  
合計 出税拾七万七千八百拾五圓 (右出税万七千八百拾五圓) 出税八千八百拾五圓

北海關稅 少稅者三千七百拾圓

車稅 少稅者三千七百拾圓

第九年度 (決算表) 合計 少稅者三千八百拾圓 (右記各款之總額) 少稅者三千八百拾圓

酒類稅 少稅者三千八百拾圓

北海關稅 少稅者三千八百拾圓

第十年度 (決算表) 合計 少稅者三千八百拾圓 (右記各款之總額) 少稅者三千八百拾圓

酒類稅 少稅者三千八百拾圓

北海關稅 少稅者三千八百拾圓

車稅 少稅者三千八百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

船稅 少稅者三千七百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

船稅 少稅者三千七百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

船稅 少稅者三千七百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

船稅 少稅者三千七百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

第十年度 (決算表) 合計 少稅者三千八百拾圓 (右記各款之總額) 少稅者三千八百拾圓

酒類稅 少稅者三千八百拾圓

北海關稅 少稅者三千八百拾圓

車稅 少稅者三千八百拾圓

酒類稅 少稅者三千八百拾圓

北海關稅 少稅者三千八百拾圓

車稅 少稅者三千八百拾圓

酒類稅 少稅者三千八百拾圓

北海關稅 少稅者三千八百拾圓

車稅 少稅者三千八百拾圓

酒類稅 少稅者三千八百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

船稅 少稅者三千七百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

船稅 少稅者三千七百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

船稅 少稅者三千七百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

船稅 少稅者三千七百拾圓

煙州稅 少稅者三千七百拾圓

北海物  
一拾萬七千三百九拾八圓  
一拾萬七千七百七拾八圓  
海軍物  
三千三百八圓

船稅  
一拾萬七千三百九拾八圓  
海軍稅  
三千三百八圓

第十年算度 一段算表 續

酒稅  
一拾萬七千三百九拾八圓  
一拾萬七千七百七拾八圓  
車稅  
三千三百八圓  
度量衡稅  
三千三百八圓

煙州稅  
一拾萬七千三百九拾八圓  
船稅  
一拾萬七千七百七拾八圓  
海軍稅  
三千三百八圓

第十年算度 一段算表 續

酒稅  
一拾萬七千三百九拾八圓  
一拾萬七千七百七拾八圓  
車稅  
三千三百八圓  
度量衡稅  
三千三百八圓

煙州稅  
一拾萬七千三百九拾八圓  
船稅  
一拾萬七千七百七拾八圓  
海軍稅  
三千三百八圓

合計  
一拾萬七千三百九拾八圓  
一拾萬七千七百七拾八圓  
三千三百八圓  
三千三百八圓

親以弟之功七  
紙自由電算中  
手在俾民含道  
借言覽此也  
明治十七年二月廿九日

内務卿山縣有朋

太政大臣三條實美殿

北海物 七拾五万三千九拾二圓  
車稅 七拾五万七千九拾二圓  
陸軍衛稅 三千三百圓

合計本年並前九年并各拾二圓 右各不詳並前七年并各九千五百拾二圓

第十年年度 豫算表續

酒稅 七千五百拾二圓  
北海物 七拾五万八千九拾二圓  
車稅 七拾五万九千九拾二圓  
陸軍衛稅 三千七百拾二圓

合計本年並前九年并各七圓 右各不詳並前七年并各八千九百拾二圓

第十一年年度 豫算表續

酒稅 七千五百拾二圓  
北海物 七拾五万九千九拾二圓  
車稅 七拾五万九千九拾二圓  
陸軍衛稅 三千七百拾二圓

合計本年並前九年并各七圓 右各不詳並前七年并各八千九百拾二圓

船稅 七拾五万七千九拾二圓  
陸軍衛稅 三千三百圓

煙什稅 七拾五万七千九拾二圓  
船稅 七拾五万七千九拾二圓  
陸軍衛稅 七拾五万七千九拾二圓

煙什稅 七拾五万七千九拾二圓  
船稅 七拾五万七千九拾二圓

陸軍衛稅 七拾五万七千九拾二圓

別紙自由寛復中之近狀探偵書  
手在俟目含迄借言覽也

明治十七年二月廿九日

内務卿山縣有朋

太政大臣三條實美殿



前由新開件過日地方後代諸氏次議より補助に山を不守亦極相成是に案自ら迄  
維持得意に山を任假然に五月廿五日山金を不守類五名内僅に百五十五円多取レレ  
有之斯任故去月三十日金リ及任押方不山金亦借集漸以併肩過五分任押借  
有之右に右の如何に成に成底後期に及在額高に諸新聞社維持薄は下過考任借又小  
金は白下在山山は之の持り成に下國却能任假且又歳暮に及に山金高強に及不金要少  
花分前在借并是早に及任推所誠減落に有様は所諸金高に及任借血に復因も是に誠討つ  
維持者自ら謝絶致假外並に假  
在後山に我輩自新開社各員諸氏及其他有志諸氏而然御報告下度指又等々  
諸氏共々何れも若輩有之假に未手假時會に維持に及も未假に及も小生於是應た手集  
り持り所有之假是及加美に及被下度指者大判に致具  
明治二十六年三月十日  
寧前館幹事御下  
早 亭

前由通日氏より神田城に相成復假者録に及も時困難に極に至居復事其事情毎  
御教道に及諸君曾御承知通致弟に如何に致方並に且日氏事情も當者以來日氏  
人言其難難推御より教り金に及也今迄稍に維持に及も最早一人の力に及も到成難支起  
り先般臨時會の節に曾諸君相談相成復我言諸君も同手事情酒席より先月五日同會  
月十日来月五日山に及般集金を由り各知事均補助に及も御承知相成復事に及も約に及も  
及び他方多分有之假に未手假時會に維持に及も未假に及も小生於是應た手集  
誠社世話に謝絶致り假に及も御世腹且如何に及も来手會迄是非維持に及も  
會も期に及も御評議に及も如何に及も博倉に及も其維持に困難に及も甲借力に及も  
明治二十六年三月十日既収に及も同日分三十日四月分三十日四月分三十日四月分三十日

成信公是... 御送生相成... 御信在甲...  
 御得者... 御送生相成... 御信在甲...  
 御得者... 御送生相成... 御信在甲...

寧靜館

自中... 御信在甲... 御得者... 御送生相成...  
 御得者... 御送生相成... 御信在甲...  
 御得者... 御送生相成... 御信在甲...

御得者... 御送生相成... 御信在甲...  
 御得者... 御送生相成... 御信在甲...  
 御得者... 御送生相成... 御信在甲...



このコマには文字の不  
鮮明な部分がありますか  
ら下記の原本をみて下さい

請求番号

2A 1 別 9

新中...  
 成...  
 候...  
 三...

寧靜館

別...  
 大...

明治七年三月三日

三傳方...殿

警視廳

このコマには文字の不  
鮮明な部分がありますか  
ら下記の原本をみて下さい

請求番号

2A 1 別 9

三 野 本 野 本 敬

野 本 野 本 敬

野 本 野 本 敬

野 本 野 本 敬

野 本 野 本 敬

松尾良一一行本日前能御船廣島九上陸下陸行大... 山崎... 杉本... 惟... 白... 此... 片... 下... 德... 志... 易... 如... 上... 微... 然... ヲ... ヲ... ヲ...

山崎... 杉本... 惟... 白... 此... 片... 下... 德... 志... 易... 如... 上... 微... 然... ヲ... ヲ... ヲ... 由又此...

このコマには文字の不  
鮮明な部分がありますか  
ら下記の原本をみて下さい

請求番号

2A 1 別 9



日本集會中... 論見...

餘論

本日集會... 論見...

三月十日記

三月十二日

本日十時... 寧靜館... 前夜經理... 相談...

抄九日  
為氏子より備置奉りて保重監之也

明治三年三月十九日 大臣 藤村 保典

三傳方政大臣殿

藤村 保典



警 視 廳





